



大明小学校

# 校長室から

令和元年10月1日

No. 30

文責 校長 飯久保一男

## 学習意欲（やる気）



明治5（1872）年に学制が公布され、日本の学校制度が始まりました。日本の学校の歴史は150年近くになります。そのころの小学校の就学率は30%程度で、ほとんどが男子でした。多くの子は学校に行かず、働いていました。3年後には、女子が20%、男子は50%を超えました。そして、明治の終わりには、男女ともに100%近くになり、日本の子どもの全てが小学校に通うようになりました。

明治の始めには、子どもは大事な働き手でした。わざわざ授業料を払ってまで学校に通わせるのには強い動機が必要でした。実際に農村では、貴重な働き手である子どもを学校に通わせることに反対の声が上がり、授業料の負担もあったので、小学校廃止を求めて農民一揆が起きています。それにもかかわらず、100%の就学率になったのはどうしてでしょう…。それは、身分制度が廃止され、勉強をがんばれば、誰でも豊かな暮らしができる世の中になったからです。

江戸時代の「士農工商」という強固な身分制度はご存知だと思います。武士の子は武士として、農民の子は農民として、生きていくことが強制されていました。明治時代になって身分制度が廃止され、四民平等となり、たとえ貧しい家に生まれたとしても学校に通って優秀な成績を修めれば、将来の展望が開けるようになったのです。現代でこそ当たり前のことですが、当時の人々には強烈なインパクトがあったようです。人々はどうかして小学校に通わせようとなりました。家柄や身分に関わらず誰でも豊かになれるチャンスに、勉強しないわけがないのです。つまり、学校には、勉強したいから行くという子どもが集まっていたのです。

勉強したいという子どもばかりが集まっている場合、そこでの教育は、大した指導の方法がなくても、教えることができってしまうものです。教わる子どもは覚えたいという気持ちがべらぼうにあるわけですから、下手な教え方でもどんどん覚えていきます。当時の日本は、指導法がなかなか進化しない国だったそうです。その原因は、こういうところにあったようです。

ところが、学校制度が整備されてくるうちに、勉強をしたくないけれども学校に行く、という子どもが増えてきました。勉強したくないという子に教えるのは大変だということは理解していただけたと思います。

そこで、まず、学習意欲を育てる（勉強をやる気にさせる）ということを考える必要が生まれてきました。現在、私たちが授業をつくるときに、いかに学習意欲を掻き立てる授業をつくるか、切実感のある学習問題を設定できるかということは重要なポイントになっています。子どもたちが考えてみたい、やってみたいという授業を設定することが重要なのです。子どもたちが学習意欲をもってやる授業は、子どもにとって、楽しく・わかる授業、教師にとっては指導するのが楽しい授業になります。

…中には必要に迫られて学ばなければならない状況になり、学習意欲を奮い立たせ、身につくものもあります。私は、中学から大学まで英語の授業を10年間受けましたが、混乱してわからなくなっていくことはあっても、しゃべれるようにはなりません。しゃべらなければ困る場面に出会わなかったからです。20年ほど前に、ニュージーランドに海外研修に行く機会をもらいました。日本語の全く通じない場所で、4週間過ごすことになりました。私のつたない英語でしたが、必要に迫られて四苦八苦しながら会話をすると、

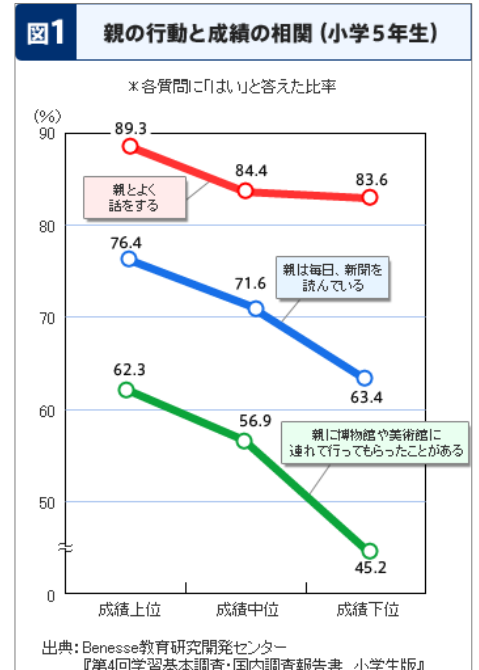


ラグビーニュージーランド代表  
オールブラックス「ハカ」

何とか過ごせるものでした。英語の通じる場所ならば生きていけるかも…と変な自信をつけて帰ってきました。留学をして、アメリカの家庭に放り込まれて2・3年もすると英語をしゃべれるようになるといいます。必要に迫られ、学ぶ意欲が旺盛になるからでしょう。

…経験したことによって、学ぶ意欲がわくこともあります。前述のニュージーランドの研修の前には、膨大な量の資料をもらいました。事前の研修会もありましたので、一応目を通しましたが、全然、頭に入っていませんでした。ところが、行っている間、または行ってきてから読み返すと、なるほどそういうことだったのか…ということがたくさんありました。経験したことによって、興味がわき、学ぶ意欲となったのです。

大工さんや調理師さんなど、手に職をもつ職業の場合、この職で生きていくんだと覚悟して弟子入りした人には、どんな教え方をしたとしても、教えられるのではないのでしょうか。学ぶ覚悟（意欲と言い換えます）がある人に、それを教える人がいれば、身に付くものだと思います。こういった職人の世界では、師匠的な立場の人が教えないこともあります。何も言わなくても態度で理解しろ、先輩のワザを盗めという教え方でも、意欲のある弟子は覚えていくものでしょう。ところが、現在、こういう職業の後継者を育てることが大変なようです。そこに、学ぶ意欲があればいいのですが、息子だからといって強制的にやらせようとしてうまくいかず、代々続いてきた職業がそこで途絶えてしまうということもあるようです。師匠や先輩から、理論はなく、意欲をもってワザを教えられて覚えた人が、意欲のない人に教えるためには、そこに理論が必要になり、興味（意欲）をわかさなければならず大変難しいことになるのです。



では、学習意欲を高めるために家庭ではどんなことをしたらよいのでしょうか。

**それは、先日お配りした **家庭学習の手引き** を参考にいただくことを「おすすめ」します。**

また、毎年6年生が受けている全国学力・学習状況調査の結果からも次のことがわかっています。

#### 1 規則正しい生活習慣を身につけている子

<毎日同じ時間に寝ている><朝ごはんを必ず食べてくる><ゲームをする時間が決まっている>  
 こういう家庭の子は学習意欲が高いという調査結果があります。学力調査の結果もよい結果です。

#### 2 家庭学習の習慣が身についている子

家で学校の授業の復習をしているという子は、学習意欲が高く、成績もよい結果になっています。

#### 3 読書をする習慣が身についている子

読書をする習慣があるという子は、学習意欲が高く、学力調査の正答率も高くなっています。

#### 4 自信や夢をもっている子

「自信や夢をもっていますか？」この調査にプラスの回答をした子は、学習意欲が高く、正答率が高いという結果が出ています。

子どもたちの学力の向上のためには、教師の力量を上げることが重要です。学習意欲のためにも魅力的な授業をつくることも欠かせません。そのため、日本の学校は、校内研究会という取り組みがあり、日々研究を積み重ねてきています。しかし、家庭の協力なしでは子どもたちの学力を向上させることはできないのです。夜は遅く寝て、朝はギリギリまで寝ていて、1校時開始から、でっかいあくびをしている子…、この子に指導することは、大変なことなのです。